

俳

5  
2016

俳句雑誌[お志]



# 気韻

能村 研三

## 御柱祭

三月十一日上野吟行

みちのくを思ひ料峭上野駅

鶉の羽を扇干しして春薄日

五年を弔うてゐる春の鶉

葛西水族館

太刀魚の春愁といふ立ち姿

南信濃支部のお誘いで四月三日、四日にかけて長野県諏訪の御柱祭に行ってきた。この祭は七年毎の寅と申の年に行われるもので、前回もお誘いを受けたが、この時は仕事が現役であったので止むなく断念、遠藤真砂明さんが代わりに行ってくれた。

茅野へは、朝早くの「あずさ」に乗れば交通の便もよい。今回こちらからは、森岡正作さん、石川笙児さん、小林和世さん、福島茂さんが同行してくれた。

電車は満席で、御柱祭の熱気がすでに感じられ、本行徳句会の小川流子さんと夫妻も乗り合わせていて祭を見に行かれるところであった。

茅野駅には支部の方々が迎えに来て下さり、早速地元の名の書かれた法被を着て、藤森支部長が手配して下さった、燃料屋さんの二階の特別の棧敷から上川越しに「木落し」を見せて頂いた。

鳥曇り繁殖賞の水族館

水族館の波に力やうらけし

深海に悪相おこぜ花曇

花粉症臨機応変とはいかず

府中大國魂神社

花明り底抜け柄杓かざし見る

桜季国府名残りの気韻かな

御柱祭は山中から御柱として樫の大木を切り出し、各地区の氏子の分担で曳行し、社殿の四方に建てて神木とする勇壮な大祭で、氏子は木遣りや喇叭に合わせて曳行する。

上社、下社合わせて十六本の樫の木が御柱となるが、私たちは上社の「本宮二」という樫の木の木落しを見ることになった。

上社の御柱にはめどてこと呼ばれるV字型の角のように大きな挺子棒が御柱の前後についている。このめどを左右に揺らして氏子が乗り指揮を執りながらおんべを振る姿は壮観である。

御柱が急な坂を一気に下る祭りのクライマックスは、技と度胸がなくてはできないこととその瞬間には大きな拍手と歓声が沸き起こった。

この後、御柱を宮川の雪解け水で洗い清める「川越し」を見た。雪嶺の蓼科の山々を背景にして冷たい流れに氏子たちが我先に飛び込む姿は壮観である。

伊勢神宮の式年遷宮や御柱祭など何年か毎に新しくしていくことは氏子たちの魂の蘇りを意味するものであるそうだ。

# 蒼茫集



たぶの木

楠原幹子

水温む年相応の恙にて  
春泥や幼子ひよいと宙に吊り  
石鯛のダンディーな縞春浅し  
春光吸収ゆりかごとなる甘藻  
祝祭のごと白れんの揃ひ咲き  
たぶの木の瘤に目鼻やあたたかし

なかんづく

宮内とし子

なかんづく春光稚魚に集まれり  
縄絢ふに足も働く菜種梅雨  
鳥帰る海より臨む麿崖仏  
岩葛西臨海水族園三句あらば岩となる魚春愁

水槽の大魚つぶやく日永かな  
海底に引き込まれたる春の夢

降りて来る

林昭太郎

レコードの回る埃も二月尽  
春風や平積みに買ふ旅の本  
観覧車葛西臨海公園春降りて来る降りてくる  
新しき空を求めて木々芽吹く  
裏おもて使ふ俎板菜種梅雨  
囀や滴らせ干すスニーカー

傍目には

千田百里

水族館二句  
傍目には春愁と見ゆ翻車魚は  
魚は水に上りて七大洋巡る

俳人は古い上手とや茄子を蒔く  
花時計お八つの位置のすみれ草  
胸襟を開く春風仕舞ふべく  
兜町昏れ料峭の灯の尖る

花辛夷 森岡正作

合格の大き封筒胸に抱く  
農具市立ち喝采の花辛夷  
岩礁のみな笑窪持ち春の潮  
日本を出でざる思考菜種梅雨  
結局は上野に決まる花三分  
引鴨の鼻梁りりしく翔ちにけり

咲くやうに 大川ゆかり

オルガンに遠き風音二月尽  
余寒なほもう使はれぬ植木鉢  
咲くやうに揚げられてをり露の臺  
春霖や色深めたる珈琲酒

ゆふぐれに少し止む風沈丁花  
ねえねえと猫の寄り来る鹿かな

一 心 大畑善昭

梟に法力のこと問はれけり  
帰らねばならぬ一心鳥帰る  
逃水の辺りたましひもゐるか  
春なれや布団は夢を結ぶ船  
紅梅やいまよちよちの男の子の歩  
木の股にしばらく宿り春の雪

朝の光 安居正浩

オムレッツに朝の光の届き春  
雛壇の仕丁に眼鏡預けおく  
蝌蚪生れてまだ神の子になるつもり  
梅園に演歌流れてゐたりけり  
咲き揃ひても三楹の影増やす  
喝采へいまま風船の手を離れ

祝大矢恒彦句集「風船」

くくくくくくと

田所節子

佐保姫の何に拗ねしか春の雪  
椅子音のあと卒業生ゐなくなる  
春愁の声とも鳩の鳴いてをり  
山鳩のくくくくくと花ぐもり  
春光の泡の筋なす作り滝  
鳥探しゐる春愁の望遠鏡

記念樹

久染康子

芽起しの雨に膨るる上野山  
ずんぐりむつくり剪定済みし大銀杏  
天と地の春を均して観覧車  
裏浜を黒一色に若布干  
三辺がいつも空いてる春炬燵  
菜種梅雨鉢の記念樹地に移す

三月の祈り

藤原照子

仏へは本音つぶやきおぼろの夜  
補聴器の音の尖りや春疾風

とどこほる稿へ一喝春の雷  
三月の祈り焦土へ海底(うなそこ)へ  
御神体の山を臨めり花りんご  
かげろふや波郷渡りし葛西橋

不意の風

甲州千草

カーテンに不意の風湧く霾ぐもり  
卸し金の突起いろいろ鳥の恋  
湯葉すくふ箸の太さよ暖かし  
腕組めば胸の隠るる春愁  
足浮かすために掴む枝芽吹きをり  
鳥の恋ときをり海へはみ出しぬ

応変の脚

細川洋子

飛行機の離陸逃げ水渡る中  
寄居虫の応変の脚繰り出せり  
なかんづく打たれ強さの青き踏む  
一斉に芽吹くといふに匂はざり  
蘂や嗅覚のなき鼻寄する  
塵芥車「乙女の祈り」流す春

魚ねむり 渡辺輝子

水切つてみどり濃くなる鶯菜  
早春の日の良く当る保育室  
蛸焼に舌焼かれたる余寒かな  
牡丹の芽先師に従きし長谷詣  
啓蟄や甘藻に抱かれ魚ねむり  
水温む昔名残りの貯木場

卒業期 小松誠一

壁に貼る決意剥がるる二月かな  
浦曲まで波を届ける春北風  
間柄急に狭まる卒業期  
突然に闇を抜け出す春の猫  
金縷梅やちぢみは明日へ伸びるため  
貝寄風に浦鳴り高くなりけり

四月馬鹿 松井志津子

蕨採る歩幅に叶ふ流れ跳び  
持ち帰る寿司の片寄る四月馬鹿  
温む水日がな零せり浚漕船

春昼の灯台発射待つ構へ  
鳥雲に封印したきことひとつ  
一錠が己眠らす春うれひ

斎田 成宮紀代子

「とめ・はね」の指針多様になりのだか  
斎田のありて母郷の蓬餅  
いかなごの釜上げ祖父の遠忌かな  
玻璃ごしに「ウツ」と顔寄す春おこぜ  
つるつると鱒の背に触る桜東風  
京葉線もの憂く曲り春霞

鴨の影 鈴木良戈

鴨冴えて孤影群影それぞれに  
鴨黙し己のさむき影曳ける  
閘門の大きく黒し春夕日  
閘門へ春落日の早きかな  
芽柳やゆつくり動く屋形船  
それぞれの水輪に鴨の一羽づつ

# 潮鳴集



一行詩

安藤しおん

山笑ふ発芽しさうな栗鼠の糧  
空抔げ漕ぐふらここの一行詩  
根絡げの荒縄なじむ菜種梅雨  
凝らし見て表裏に遍路回遊魚  
江戸前にペンギン佇てり鳥雲に

葛西沖

佐々木よし子

春浅し本棚の本凭れ合ひ  
待つといふ充実のとき牡丹の芽  
下萌のとびとびフリーマーケット  
高鳴きのひと声鶴の北帰行  
凧畳敷く料峭の葛西沖

綺羅

篠藤千佳子

一点を守りきつたる息白し  
路線図の今ぬるところ春隣  
おのづからこはれて春の水の綺羅  
着席の合図ひと声あたたかし  
学生に放課後バレンタインデー

ぶんがぶんが

栗原公子

ひこばえや児にひとかどの口答へ  
白鳥を見しより浮遊せる心地  
笑ふ山くすぐるやうにバスの旅  
亀鳴くやマイナンバーの隠し場所  
春昼やぶんがぶんがと手風琴



春の浮力 七田 文子

楕円形に中心ふたつ亀鳴けり  
残心の白と思へり花辛夷  
つばくらの天空どこもスクランブル  
観覧車春の浮力に乗るやうに  
長き長き貨物列車や菜種梅雨

春動く 中島あきら

靴紐を替へ玄関の春動く  
春風に置くふくよかな壺の耳  
余寒なほクロワツサンのがらんどろ  
春荒の駅自転車に鍵二つ  
水音の囁くやうに梅の花

菜種梅雨 大沢美智子

ふらここや遠き白帆の走り出す  
はくれんや日を纏ふとも弾くとも  
鳥影の水脈はるかなり雛納  
部屋ひとつ余すくらしや菜種梅雨  
廃校の桜もつともふぶきををり

詩 藻 峰崎 成規

引く波の記憶の欠片桜貝  
摩天楼孤高忘るる朧の夜  
予報士を半歩出し抜く初桜  
海市立つ胸の詩藻は沖に立つ  
茎立や中也太宰は書架の奥

春の色 荒木 澤子

ふらここの互ひ違ひに語りをり  
京菓子の店より春の色となり  
芽ぶかむと震へる木々に矜恃あり  
街路樹の根方の青む暖かさ  
富士見ゆる高階風は弥生なり

春色の汽車 小嶋 洋子

クロゼットに眠れるドレス春一番  
春色の汽車を乗り継ぎいま此処に  
妹は妹のまま梅白し  
鏡の中の時計を見てる夕朧  
しよつぱさも生きる妙にて桜餅

# 沖作品



# 能村研三選

計画を予定に替へて春隣  
遠野火の山より高き煙かな  
すべり良き鉛筆選ぶ大試験  
先頭に立てば疲れず青き踏む  
地底より春の息吹や水琴窟  
春雪を載せ竹垣の疣結はひ  
荃立の 一花 一花の主張かな  
まだ眠き嶺々をくすぐる春の風  
春の街打出小槌町とあり  
ブロンズ像磨く漢ら風光る  
五羽残る鴨に子細は聞かず置く  
行き 戻る 骨董市や春隣  
沈丁のほど良き距離に風と会ふ  
台本はありさうで無く春一番  
まづ声の出てから転ぶ春の泥

千葉

塩野谷慎吾

清部 祥子

坂本 徹

連風の先端ことに風の色  
鞆を漕ぎぬていづこへも行かず  
工学部裏のささめき雪解水  
まだ風の硬きに畦の犬ふぐり  
大いなる神話の国の蜆汁  
啄木を偲ぶ 洩民水温む  
裏畑の雉子の声に目覚めけり  
一つぶの 大き 瞬き 雪解屋  
フルートの音色軽やか春の虹  
湧き水の音なき流れ座禅草  
MRIに晒す我が身やおぼろなる  
入港す島けぶるとも臍とも  
岬端に高く干す魚四温かな  
まなうらのらんたん紅蓮春の闇  
勝風をたぐる翁の町法被

神奈川

大矢 恒彦

岩手

上野 節子

長崎

田川美根子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

計画を予定に替へて春隣 塩野谷慎吾

楽しい旅の計画であろうか。「春隣」は冬の季語で、「春近し」「春待つ」などと同じ意味だが、こちらの方は、客観的な表現でありながらも、まだまだ寒い中に思いがけなく春が近いと感じる時の小さい感動がある。「春浅し」は厳しい寒さは終わつたものの、まだ万全の春とは言えず日によっては辛い寒さが残っている状態を表し、「春隣」は長かつた寒い季節がもうすぐ終わるといふ前向きな気持ちが表現される。「暖かくなつたら旅に行こう」という計画から、行先や日程なども決めたより具体化した予定に変わった。

春雪を載せ竹垣の疣結はひ 清部 祥子

竹垣は日本庭園には欠かせないもので、目隠しや間仕切り「和」の世界が広がる。竹垣の結び方も美しく黒い棕櫚縄でしっかりと結ばれる。強くしっかりと結んであるだけでなく、交差させたり、縄先を垂らしたりなど、いろいろな結び方があり竹などを十字に結ぶ際に用いる基本的な結び方が「疣結」という

もので、向こう側に透けて見える庭の風景に黒い縄目が、ほどよいアクセントになる。黒い縄目にほんのわずかの春雪が載っていた美しい瞬間を捉えた。

五羽残る鴨に子細は聞かず置く 坂本 徹

春になると鴨は北国へ帰っていく。引き鴨は群ごとに移動するが、この群とは離れ春が深くなつても帰らずに残る鴨がいる。なぜ、残るのか。生物学的な解釈は判らないが、鴨には事情があつて皆と一緒に帰れず、そのまま残ることになったのだろう。高齢か病気が怪我か、あるいは連れ合いがそうなのか、北への長旅を思えば共に飛び立てない事情があるのだろう。そんなことを考えるとどこか憐情を誘ふ。

連風の先端ことに風の色 大矢 恒彦

一本の風糸に多数の風を繋げて揚げる風揚げ。三百、四百などは普通でギネスの記録では一万五千近くを繋げたそうだ。こうした風揚げは海辺の砂浜など広い場所でなければ揚がらないだろうが、壮観な風景であろう。風の向きによつては連風がうねりを見せ、地上から大空へ伸びていくさまは見事である。空高く登りつめた連風の先端の風の色はどんなものなのだろう。

一つぶの大き瞬き雪解星 上野 節子

「雪解星」とは、いかにも東北北国の春の気配を感じさせる季語である。これは本格的な雪解け前、だんだん日差しが高くなり、水蒸気が立ち上がつてくると、冬の間はざらざらと透明に見えた星が、少し潤んでくる。その潤みを持った三月頃の雪国の夜星を、「雪解星」という。冬の間雪に閉ざされていた東北人にとつては待ち望んでいた春の訪れである。 〈以下略〉